西日本新聞　（第3種郵便物認可）

接客やお金の管理、中高生のうちに

福岡市の放課後デイ、療育に「就労準備」

スムーズな社会参画目指して

傾聴記

人付き合いや接客、お金の管理…。主に中高生を対象とする福岡市東区の放課後等デイサービス事業所（放デイ）「ツバサプラス」は、発達障害や知的障害があっても、将来、仕事に就くことを見越したスキルの習得を療育に取り入れている。成人前から就職へのイメージを高め、スムーズな一般就労や社会参画につなげることを目指す。「働き、収入を得る喜びは社会性や自信に直結する」と運営会社代表取締役の中村雄太郎さん(45)。「そんな体験を味わえる機会を増やしていきたい」と話す。

7月。同事業所の一室では、中学生たちがVR(仮想現実)の専用ゴーグルやタブレット端末を活用し、職業訓練の一環として接客を学んでいた。

VRも活用し訓練

ゴーグルを着けると、自分が実際に店内にいて、目の前の店員と言葉を交わす―といった場面を体感できる。「最初の店員は声も全然出てないし、大丈夫かと思った」「次の店員は元気がよく、目線もしっかり合って良かった」「でも元気がよすぎると驚く客もいるから、ほどよい調子で対応するともっといいね」。支援スタッフと振り返りながら、望ましい距離感や態度について話し合う。

VRは、学校での友達付き合いなどさまざまな場面の訓練ができる。ゴーグルを装着した人の視線の動きも記録が可能。一人一人の目線も確認しながら、アドバイスに生かす。

昨年から同事業所に通う中学3年の渡邊一咲(いつき)さん(14)は「勉強になることが多いです」と笑顔だった。

VRのゴーグルを着けた渡邊一咲さん(中央)。職業訓練の一環として、スタッフや仲間と接客を体験した＝7月25日、福岡市東区の「ツバサプラス　ポラリス館」

二次障害防ぐため

中村さんはもともと福岡県古賀市で就労継続支援A型、B型の事業所を運営していた。利用者は一般企業に勤めていても周囲になじめず、引きこもってしまった40～50代が多く、お金の管理ができない人もいた。

「若い時に、コミュニケーションや社会に出るために必要な基礎を学ぶ場があれば、（周りの理解が得られないためにうつ病などを引き起こす）二次障害に悩む人もいなくなるのでは」。そう考え、「就労準備型」と銘打った放デイを昨年8月に開設。今年6月には、もう1カ所増やした。

定員は毎日各10人。VRを使った訓練やパソコンのプログラミングのほか、芸術系の学校出身者や音楽療法士ら多様なスタッフが、アートスキルやダンスなど、得意分野を生かしたカリキュラムを行う。

小学校低学年で放デイに通っていても、遊びや創作活動が多いことから、年次が上がれば利用しなくなる例も少なくない。中高生に適した療育の場として、その必要性も含めて広く周知したい考えだ。

今後は障害者雇用に積極的な地元企業の職場見学も予定。「いずれは自分たちのアート作品などをネットで販売するといった試みも取り入れたい。中高6年間で、自分の得意分野を見つけるお手伝いができれば」と中村さん。地域交流も意識し、8月末には昨年に引き続き、夏祭りを開く。

別の事業所も導入

ツバサプラスの取り組みは、広がりも見せている。

近くの小学生向け放デイ「コミット」ではおやつの時間、ただお菓子を提供するのではなく、スタッフや上級生が「駄菓子屋」に扮(ふん)する。「10円」「30円」など実際の値段を記載した箱に色とりどりの駄菓子を並べ、下級生は手作りのお金と引き換えに、好きなものを〝購入〟。お小遣い帳に記入もする。

運営会社代表取締役の湊圭司さん(46)が、福祉の仕事仲間のつながりで知り合った中村さんの取り組みに共感。ツバサプラスでも実践している「駄菓子屋」をコミットでも導入し、低学年のうちに、お金の管理や使い方に慣れてもらうことにした。

「子どもたちが将来、自分らしく楽しく生きていくために今、何ができるのか、丁寧に考えながら療育をしている」と湊さん。「小学生のうちにやれる体験を提供し、一人一人を成長に導いていきたい」

（編集委員・三宅大介）

駄菓子屋の客に扮し、手作りのお金と引き換えにおやつを選んだり、お小遣い帳に記入したりする小学生たち＝7月28日、福岡市東区の「コミット」

福祉　寄り添う

ワードBOX

放課後等デイサービス事業所　児童福祉法に基づき、発達障害や知的障害などがある就学児を、放課後や夏休みなどの長期休暇中に預かる施設。生活能力向上のために必要な訓練や地域との交流、創作活動、余暇などを提供し、自立や発達を支援する。2012年に制度化された。

ご意見、ご感想、情報をお寄せください。お名前と連絡先は必ず明記してください。
【ファクス】092(711)6246【メール】syakai@nishinippon.co.jp【郵送】〒810－8721（住所不要）西日本新聞社会部福祉取材班